

## ギターと私(1)－高校入学以前

ギターとの出会いを考えると、いつも浮かんでくる光景がある。

それは、私が中学生だった頃だから、今から 50 年以上遡った、昭和 41 年頃、父の兄、つまり伯父が、私にギターを差し出してくれている光景である。場所は岐阜市早田にあった、今はなき生家。

なぜ伯父がギターを贈ってくれたのか、前後関係はすべて忘れたが、生家同様、今は亡き伯父のギターを差し出す笑顔は、まざまざと脳裏に浮かんでくる。それには、「カルカッシギター教則本」とともに、「時々寄るから、練習しておくように。」という言葉も添えられていた。

以下は私の想像に過ぎないが…。

「昭和 42 年から昭和 44 年にかけて日本で大流行した」(ウィキペディア)、「グループサウンズ」に熱を上げていた私のことを伝え聞いた伯父が、気をきかせてギターをプレゼントしてくれたのではないだろうか？ ちなみに、伯父はトロンボーン吹きだった。若いころはモダンジャズに憧れトロンボーンを吹いていたそうだが、当時の伯父は、長島温泉の専属バンドで働いていた。歌謡ショーのバックバンドの一員だったわけだが、故村田英雄等の結構名の売れた歌手も来演していたようだ。後にカラオケに駆逐される運命を辿ることになるのだが、その頃は、まだあちこちに「専属バンド」が存在していた時代だった。

話がやや脱線したが、そんな伯父がギターをプレゼントしてくれた訳は知る由もない。しかし、伯父は、甥が音楽(といっても「グループサウンズ」だが)に夢中になっていると聞いて、うれしかったと同時に少し不安になったのではないだろうか？ そういえば、「あのケチなジン(岐阜弁で「人」の意味)が、よくギターをくれたものだ。」という父の言葉も記憶にある。さらに想像の翼を広げれば、クラシックギターをカルカッシ教則本とともに贈ってくれたところに、「自分のように音楽で身を持ちこずしてはいけないよ。」という、伯父の考えが窺われるような気もする。つまり、音楽をやるなら、固いクラシックを勉強するべきだと考えていたのであろう。今から考えれば、クラシックだろうが、ジャズだろうが、他の音楽だろうが、おしなべて音楽で「食える」はずなどないのだけれど。

さて、そんなわけで、伯父は私にギターをくれたわけだが、当の本人はドラムに夢中だった。むろんドラムセットなど買ってもらえるはずもなく、スティックだけを手に入れて机等を叩いていた。後年、大学生時代、ギターアンサンブルで歌謡曲を演奏したときに、下手ながらドラムを叩いたのはその修練?のおかげである。舞台上でドラムを叩くなど、今から思えば冷や汗ものだが、いわゆる「若気の至り」であろう。「てんとう虫のサンバ」冒頭のドラムソロを叩いていたことを懐かしく思い出す。それで、肝心のギターは、あまり練習した記憶がない。ただし、カルカッシ教則本の最初の方に載っていた、ハ長調のエチュード(ドソドソシソソで始まるあの曲)は弾けたような記憶もあるが定かではない。

ギターの話からやや逸れてしまったが、私とギターとの出会いを記せば、大体以上のようなことである。たわいもない内容だが、私にとっては大事な愛おしい記憶である。

(2019.11.1記)

## ギターと私(2)－高校時代①

ギターとの出会いとして前回に伯父のことを書いたが、本当の意味での出会い……一時的な出会いではなく、後々まで深く関わっていくという意味での出会い……は、高校時代のことであった。

岐山高校に入学した私は、まず卓球部を探した。中学生の時にクラブ活動としてやっていたからだ。しかし、その高校には卓球部はなかった。昭和 33 年に創立され、私たちが 12 期生である母校は、他校に比べて歴史が浅いせいか、グラウンドは狭く体育館も小さかった。そればかりの理由ではないだろうが、卓球部がなかったのである。かといって、帰宅部になるつもりもなかった私は、確たる理由があつてのことではなかったが、少しばかりギターを弾いていたことあつてか、グラウンドの片隅にあつた別棟の建物(一階が美術室で、二階が音楽室だった)に足を向けた。そこには「音楽部」というクラブがあつたが、それは、合唱や吹奏楽ではなく、クラシックギターだけのクラブだったのだ。

このクラブで顧問をされていたのが、河田重之先生であつた。先生は、クラリネットがご専門の高校の音楽教師だったが、伊東尚生氏(岐阜マンドリンオーケストラの主宰者)にギターも師事していらつしやつたと聞く。で、私が最初に師事した武山明先生も、伊東尚生氏の門下生でいらつしやつたことを考え合わせれば、その後の展開が約束されていた出会いであつたと言えるだろう。「専門はクラリネット、次にギターが好きで、三番目はピアノです。」とは、当時の河田先生の言葉である。

河田先生は、昭和 41 年 4 月から同 47 年 3 月まで岐山高校に在職していらつしやつたが、新任教師として赴任された昭和 41 年からギター部を創設され、生徒たちを指導された。ギター部の期生でいえば、私たちは 4 期生に当たり、現在「岐阜県クラシックギター協会」の理事を務めていらつしやる勝村さんが 2 期生、同協会員の吉池さんが 3 期生、そして同協会の副会長を務めていらつしやる近藤清志さんは、私と同期の 4 期生である。このように、河田先生が蒔かれたギターの種が芽吹いて育つたことを考え併せれば、先生は、岐阜のギター界の恩人であろう。やや余談になつてしまつたが、ギター部の思い出はあまり多くない。それは、もっと強烈な体験をすることになるせいだが、そのことは別項で触れるので、ひとまずおく。

ギター部の思い出としては、ビゼーの「真珠採り」やモーツァルトの「アイネ・クライネ・ナハト・ムジーク」の一楽章を合奏でやったことや、一級先輩の家が経営する旅館で「弾き初め会」が催され、A.カーノの「ワルツ・アンダンティーノ」を弾いたことが記憶に残っている。年代を明らかにすれば、昭和 45 年(1970 年)の正月過ぎのことであつたろう。ちなみに、「弾き初め会」は、真詮ギタースクール友の会のイベントとして平成 19 年(2007 年)1 月に復活し、岐阜県クラシックギター協会のイベントとして 2019 年 1 月まで継続している。さらに、特筆されることに、河田先生もその会に参加され、さらには演奏していらつしやるのだ。

さて、高校 1 年生の秋だつたろうか、はっきり覚えていないが、ある日ギター部の部室に、ギター部 1 期生の先輩が、「ギタリストスギふ」という団体のコンサートの案内に訪問された。後に私も入会することになるその会は、何と 3 か月ごとにコンサートを開催していた。察するに、集客に困つた先輩が、窮余の策として母校の後輩たちを訪ねたに違いない。案内されるままにそのコンサートに出かけた私たち(私と近藤さんともう一人の同級生)は、その後の人生までを変えてしまうような経験をすることになる。

(2019.11.12 記)

## ギターと私(3)－高校時代②

前回に最後に、「その後の人生までを変えてしまうような経験をするようになる。」と、ややオーヴァーなことを書いたが、それは、あながち過言でもないのである。ただし、演奏に感動したとかといった類ではなく、そのコンサートに載っていた「ギター教室案内」を見て、故武山明先生に師事したことを指している。いつから師事したのか記憶に定かではないが、師事してまもなくの頃、レッスンを待つ我々(近藤さんと一緒だった)の前に現れた先生が、「今外から帰ったばかりで汗を流したいから、すぐにはレッスンできない。」と言われたことや、高2の夏休みに「合歓の郷」へ、先生や諸先輩たちと一緒して合宿に行ったことを覚えているから、高校2年生になった頃のことであつたらうか？ そうだとすれば、昭和45年の春のことであつた。

武山先生に師事し、ギターを習うようになり、自動的に先生が中心だった「ギタリストスギふ」にも入会することになって、私の生活は一変した。それは、「ギタリストスギふ」のメンバーは当たり前ながら大人の人たちばかりであり、そんな大人の人たちとのお付き合いが始まったからである。あまり大きな声では言えないが、大人のメンバーたちに交って忘年会に出席した私たち3人は、あろうことかお酒を飲み、私を除く二人はダウンしてしまつたことがあつた。念のために申せば、私は少ししか飲まなかつたからダウンしなかつただけであり、酒が強いわけではない。それで、翌日高校に行ってみたら、前の晩にダウンした二人が欠席しており、偶然にも同じクラスだった私は、担任の先生から事情を知らないかと聞かれ、答えに窮した記憶がある。まさか、「昨晚飲みすぎて、二日酔いで寝ています。」とも言えないだろう。

今から思えば、昨日まで子どもだった者が、突然大人の中に放り込まれたわけであり、一つ一つが強烈な経験であつたわけである。そんな生活の中で、ギターを弾く技量は多少上がったが、高校の成績は惨憺たるものであつた。やがて高3になり、人並みに受験勉強を始めた私は、とりあえず武山ギター教室を休会した。どうしても親元を離れて進学したかつたからである。これも今から思えばだが、大人の人たちとのお付き合いが中断してよかつたのだと思う。あのままの生活を続けていたら、どうなつていたか想像もつかない。ちなみに、私以外の二人もそれぞれ進学して、まっとうな？ 人生を送つた。

高校時代に弾いていた曲で記憶に残っているのは、初めて「ギタリストスギふ」の演奏会に出演したときに弾いた、F.ソルの「メヌエット・イ長調」やG.フレスコバルディの「アリアと変奏」ぐらいしか覚えていない。そういえば、「ギタリストスギふ」の先輩から河野ギター(1963年製5号)を譲っていただいたのも、高校時代のことであつた。後から聞いた話によると、このギターは、最初、故後藤則之先生が所有していたギターで、当時はこれが最高級であつたとのことである。この河野ギターは、それから現在までずっと私の手元にある。もっとも、ここしばらくはケースに入れっぱなしで弾いてはいない。

今から約半世紀前のことを思い出すままに綴っていると、兼好の「あやしうこそものぐるほしけれ」ではないが、妙におかしな気分になってくる。先に挙げた、F.ソルの「メヌエット・イ長調」の楽譜は、先生から貸していただいた楽譜を写譜したものが、現在も手元にある。それには、武山先生の手による「書き込み」も見える。他人から見れば、一枚の見開きの手写譜に過ぎないが、私には、今となつては放しがたいものである。棺桶に入れてもらうように、家内に今から頼んでおくことにしようか？

(2019.11.14 記)

## ギターと私(4)－大学時代①

運よく「立命館大学文学部文学科日本文学専攻」に合格した私は、希望を胸に京都へ向かった。高2の時の成績では進学さえあきらめなければならない状態だったので、自分でもよく合格できたものだと思う。この年(昭和46年・47年)の秋から冬にかけての大学受験の季節は、いまだに脳裏に残っている。将来が見通せない、辛く厳しく寒い冬であった。

さて、大学時代はあまりにも思い出が多すぎるが、とりあえず、記憶が一番強い「新人ギター演奏会」についてから書くことにする。「新人ギター演奏会」は、中部日本ギター協会が主催した演奏会である。その名のとおり、「新人」に演奏の機会を与えるのが目的であったと思われるが、同協会が発足した昭和42年に第1回が開催され、平成3年に25回で幕を閉じ、翌年から「名古屋ギターコンクール」として発展的解消を遂げた。当初は、各ギター教室から推薦された者がホールで演奏できる機会を与えられたそうだが、第5回からオーディション制に変わった。当時、東海地方でクラシックギターを志した者は、等しくこの演奏会出場を目標に腕を磨いたものである。

この演奏会の第6回のオーディション(昭和47年10月実施)に合格し、華々しく登場したのが、私や近藤さんと一緒に入門した同級生の彼であった。当時まだ耳新しかった、L.ブローウエルの「舞踏礼賛」の演奏は、さぞ審査員たちを驚かしたことであったろう。この曲を選んだのは、故武山明先生だが、常にレコードの新譜をチェックし、楽譜を入手していた先生が偲ばれる。しかし、この選曲にはギャンブル的な一面もあつたのではなかったか。それは、オーディションで、世間一般に知られていない曲を演奏するのは、ある種の賭けだからである。審査員も大いに戸惑ったに違いない。とまれ、同級生の彼は、審査員全員の投票を得て合格した。弟子も師匠も大満足の結果であり、特に、師匠の「してやったり」と言わんばかりの得意満面なお顔は、今でも記憶にある。

翌昭和48年には、私とそのオーディションに挑戦した。近藤さんが病を得て入院生活を送っていたからであり、技量的には彼が挑戦してしかるべきであったろう。そして、私は落選した。さらに、翌昭和49年には、本復した近藤さんが挑戦して合格した。オーディション落選に失望した理由ばかりではないが、私は、「武山明ギター教室」を退会した。今から思えば、3年間ほどお世話になったことになる。それからは、大学の顧問格だった尚永豊文先生にレッスンを受けたり、東京の「河野ギター製作所」の寮で、同郷の先輩、小島浩宜先生にレッスンを受けたりした。

そして、昭和50年、特定の先生に師事しないまま、無謀にも新人演奏会のオーディションに再挑戦した私は、何とか合格することができた。弾いた曲は、A.バリオス「ワルツ Op.8-4」である。昭和50年11月27日(木)、名古屋市民会館中ホールで行われた「第9回新人ギター演奏会」に出演した私は、念願を果たして心からうれしかった。ちなみに、その演奏会に出演した10人のギタリストの卵たちの中には、村松有二氏、服部寛氏、樹神功氏とともに、何と藤井敬吾氏の名前があり、その年から制定された「協会賞」は、信清秀晴氏が獲得した。

私は、自分にギターの才能があるなどと思ったことは一度もない。ただ、失敗にくじけず努力を続けることも才能の一つだとするなら、その才能は少しばかりあつたようである。というより、新人演奏会のオーディション落選を撥ね返した原動力は、負けず嫌いという反骨心に他ならなかった。

(2019.11.20 記)

## ギターと私(5)－大学時代②

大学生時代のギターのことを語るならば、「クラシックギタークラブ」(以下「クラギタ」と略す)のことは避けて通れないだろう。とりあえず、回生ごとに思いつくまま記すことにする。

一回生(関西の大学では、一年生のことをこう呼ぶ)の時は、他の一回生と同様、「カルカッシギター教則本」を練習した。先輩が後輩を教える形である。場所は、産業社会学部棟である「学而館」が使われ、何と机の上に座ってギターを弾くのである。確か4階の大教室だったと記憶しているが、終了時には、内政部長(三回生が務めるサークルの役職の一つ)の司会で、ミーティングがあった。16時30分から2時間ぐらいの活動時間だったかと思うが、これが週に二日間あった。終わりのミーティング後は、喫茶店等に場所を移して、「班別会」と称する集まりがあった。下宿に帰っても一人ポツンとしているだけだったので、この会は楽しかった。入部後しばらくすると、さらにそれから先輩の下宿を訪ね、マージャンをやったりもした。

二回生の思い出としては、演奏旅行が記憶に残っている。岡山県の津山市と香川県の高松市、そして名古屋市の三か所であった。わが大学の演奏会は、第一部が「クラシック合奏」、第二部が「クラシック二重奏・独奏」、第三部が「フラメンコ」、第四部が「ラテン大合奏」であった。我々二回生の出番は第一部と第四部しかなく、他の時はドアボーイもやった。どの会場もほぼ満席の入りであったが、今から思えば、先輩方やOBの方々の、並々ならぬご苦労があったものと思われる。第二部には、主に三回生、四回生が出演したが、「アラビア風奇想曲」(タレガ)、「悪魔の奇想曲」(テデスコ)、フーガ イ短調(バッハ)、「南のソナチネ」(ポンセ)等、中々の演奏曲目であり、レベルも高かった。その中には、現在プロとして活躍している方もいる。また、関西学生ギター連盟の主催だったか、故渡辺範彦氏のレッスン会が開かれ、「幻想曲 Op.7」(ソル)をみてもらったこともあった。

三回生になると、クラシックの技術部長という大層な役を頂き、ほぼ毎日サークル活動に出る毎日が続いた。一回生の時に触れた「カルカッシ」が週二回、「クラシック合奏」が週一回、「クラシック二重奏・独奏」も週一回、「ラテン大合奏」が週二回となれば、日曜日以外はすべてサークルで埋まることになる。「ラテン大合奏」の指揮者も兼任していたため、本当にハードであった。誰かが冗談で、「立命館大学体育学部所属クラギタ部」と呼んでいたが、確かに体力を要するサークルであった。

その反動もあり、四回生の時はサークルを退部してしまった。一つには、単位習得がままならず、4年で卒業することが難しかったこともある。また、夏休みに下宿を払い、9月以降岐阜から京都まで通ったこともあった。とにかく、私は、クラギタのOB会名簿には載っていない。今から思えば、四回生の時もやっておけばよかったと思うが、その時はその時で、精一杯であった。しかしながら、卒業してから4回ほど行われているOB会に、私はすべて出席している。それどころか、幹事役まで務めている。過去のわがまを赦して受け入れてくれた、寛大な同級生や先輩諸氏、後輩諸君には、心から感謝している次第である。「本当に申し訳なかった」と、改めてお詫びする。

(2019.11.21 記)

## ギターと私(6)ーサラリーマン時代①

何とか4年で大学を卒業した私は、世間並みに会社員になった。大きく分ければ、繊維関係の会社であった。最初の一年は、社内研修ということで工場勤務、後の二年は営業職で、ほぼ日本中を飛び回った。つまり、三年間しか在職しなかったということだが、最初からその程度の覚悟しかない就職で、こんな私に就職された会社は、いい迷惑だったろう。

さて、社会人一年生の時は、ギターをほとんど弾いてなかったと思う。社会人二年生になり、やや生活に余裕が出てきた頃、私は、野村芳生先生に師事した。年号でいえば、1977年(昭和52年)のことであった。先生は、1971年に「第14回東京国際ギターコンクール」に3位入賞され、1976年にフランスへ留学され、A. ポンセに師事された。私が師事したのは、フランス留学から帰国された直後だったということになる。ただし、そういう経緯はすべて後日知ったことで、当時の私には知る由もなかった。ということは、何も知らずに野村先生に師事した私は、かなり運が良かったと言えるだろう。

野村先生には、ギターはもちろんのこと、クラシック音楽一般他を教えていただいた。よく世間で、「私が今日あるのは、先生のおかげです。」という物言いを耳にするが、私の場合は、掛け値なしにその言葉があてはまる。1982(年昭和57年)に「第16回新人ギター演奏会」に二度目の出演をし、岐阜県婦人会館で先生とのジョイントコンサートを開催するまでの5年間は、かけがえのない年月であった。この間、数々のコンクールにも挑戦したが、一次予選は通っても二次予選の壁を破ることはできず、本選に残ることはできなかった。

やや傲慢に聞こえるかもしれないが、当時の私には、技量的にコンクールに入選する力はあったと思われる。ただ、何かが不足していた。その何かがわかるまでにはなお数年の時が必要だったのだが、私は、失意のままに「野村芳生ギター教室」を退会した。

その間、私は学習塾の講師になっていた。大学受験の時にお世話になった、当時大学生だった先生が、卒業して学習塾を経営していらっやっしたので、ちゃっかりお世話になったのである。塾長に勧められるままに、教員免許を取得するため大学に聴講生として戻ったのも、この頃であった。学生時代には、漠然とではあるが、サラリーマンと先生だけにはなるまいと思っていたが、卒業後5年もしないうちに、両方とも経験することになったわけである。

野村先生の教室をやめて、あまりギターも弾いていなかった私に、30歳の頃に転機が訪れた。某私立高校が先生にならないかと声をかけてくださったのである。私は、大いに迷った。ギターもこれといった結論が出ないままだし、高校教師という安定した職業に魅力を感じたのである。結論的には、私は、そのありがたいお話を丁重にお断りした。午前中は自由になる学習塾の講師生活になじんでいたこともあったが、やはりギターを弾く時間を確保したいという気持ちが働いたのだと思う。その割には一生懸命練習した記憶もないが、私は、学習塾の先生として生活し、趣味としてギターを弾く道を選んだのであった。一つには、ギター以外に自分のアイデンティティを見いだせない自分を自覚していたからであろう。平たく言えば、ギターにしがみつしか自分を自分として認める方法がなかったのである。

友人たちは、次々に結婚していく。親しくしていた四人組の最後に残された私は、歓楽街を彷徨い、飲めもしない酒に溺れたりした時期もあったが、またまた何とか結婚相手が見つかって家庭を持った。まもなく、父親を病気で亡くすことになるこの時期は、まったくといっていいほどギターを弾かなかった。

(2019.11.22 記)